

国際ワークショップおよび公開講演会のご報告

発達心理学会企画委員会委員長：外山紀子（津田塾大学）

2003年8月19日（火）から22日（金）までの4日間，ニューヨーク市立大学名誉教授のKatherine Nelson先生をお迎えし，（財）発達科学研究教育センターとの共催で，国際ワークショップを開催しました．ホストをつとめてくださったのは北海学園大学の小島康次先生です．今回のワークショップには36名の方が参加してくださいました．Nelson先生による講義中心の5つのセッションと，参加者による研究発表のセッションいずれもについて，活発な議論が行われ，有意義な4日間となりました．

ワークショップ3日目の午前中には，「心の理論 - 心の共同体への参入」をテーマとする公開講演会も行われました．国際ワークショップ，講演会ともに盛況のうちに終了させていただくことができました．共催していただいた（財）発達科学研究教育センターの皆様改めて感謝申し上げます．（発達心理学会企画委員会委員長：外山紀子）

K.Nelson先生からいただいた，ワークショップの概要に関する原稿と，ホストの小島先生からの原稿を以下に掲載させていただきます．

Summary of Developmental Psychology Workshop, Tokyo, August 19-22, 2003

Katherine Nelson

The overall theme of the Workshop was an Experiential theory of developmental psychology. This theoretical framework is proposed as an alternative paradigm to the dominant cognitive science theories in mainstream Western cognitive developmental psychology. Experiential psychology aligns with other theories of social-cultural development that are broadly based on Vygotskian theory or contemporary activity theory. However, it places more emphasis on the subjectivity of the individual child in accounting for development than most versions of cultural theory do.

The first session of the Workshop was devoted to outlining the idea of Experiential Psychology as the basis for developmental theory. The concept of an experiential encounter was proposed as calling on biological (evolved, embodied), ecological, social and cultural, and historical

(previously experienced) resources. These proposals were contrasted with the essentially nativist assumptions of core knowledge, domain specificity, and theory theories that have proliferated in American journals and texts.

In the second session the essentially social nature of experience and its relation to collaborative construction as a cognitive process was emphasized. Several examples of collaborative processes were analyzed, including word learning, narrative construction, and taxonomic category construction. The contribution of the child's spontaneous concepts to the construction process was highlighted together with the transformations of such concepts in response to the experience of alternative conceptualizations and organizations displayed by adults.

The third session introduced problems of symbolic systems and language learning with the emphasis on the cognitive functions of language in development. Word learning was discussed from the perspective of acquiring meaning from the experience of words in use as conceptualized by Wittgenstein in terms of language games. A number of examples of the acquisition of meaning from use were analyzed, focused on abstract terms, such as those for mental states, that cannot be learned from ostension (pointing) experiences. The deficiency of models of word meaning based solely on the paradigm of object labels was emphasized. Abstract terms are but one component of symbolic systems that characterize human language and that make language as a representational system effective in conveying cultural knowledge not available from direct experience, including stories, explanations, narratives of other experiences, science, and so on. These aspects of language in cognitive development in childhood tend to be largely neglected in current theories.

In the fourth session the collaborative construction of autobiographical memory was in focus. The social-cultural developmental model developed with Robyn Fivush was described, and its ability to account for aspects of early and later memory as well as individual differences and cultural variations was demonstrated. This model depends on the prior concepts of collaborative construction, and the sharing of experiences in language, which makes possible the differentiation of past and future time, and self and other experience. The process of memory construction was shown to be dependent on narrative and related to aspects of "theory of mind."

The fifth session consisted of the open lecture on the topic of Entering the Community of Minds. The Community of Minds is proposed as an alternative, broader conceptualization of theory of mind, with the focus on the social cultural historical community within which ideas of other minds are constructed in collaboration with those who are already members of the cultural-linguistic community. A prime claim is that language competence is critical to entering the community of minds (shown by its relation to passing the theory of mind tests) and is critically fostered by participating in narrative and conversational discussions.

In the sixth session a developmental scheme was presented that related levels of self understanding to 6 emerging levels of consciousness. Each level is related to different points in development already considered in terms of language, memory, narrative, and concepts. A tentative proposal was advanced for relating the emergence of a new level of functioning to newly apparent or salient contrasts not apparent in previous functions.

Throughout the sessions there were searching questions and contributions from the workshop participants that brought out critical points and suggested directions for modification of the theory or exploration of new problems.

<ホストより>

発達への経験論的アプローチの今日 - K.ネルソンのワークショップを終えて

小島康次（北海学園大学）

今般、国際ワークショップという大変貴重な場を提供して頂いたことに対し、発達心理学会ならびに CODER に謝意を表します。発達心理学会については、私も企画委員会の特別委員としてこのワークショップの開催に向けてコミットしてきたので、謝辞は見当外れの感なしとしますが、この特別委員というのはいわばホストを遇する（こき使う？）便法であって、やはり、企画委員会の委員諸氏には感謝の念が自然に湧いてくるのです。また、公開講演会の通訳をお願いした當眞千賀子さんには、講演会ばかりでなく、ワークショップにおいても様々な場面での的確な発言をして頂き、議論を大いに盛り上げて頂いたことに感謝申し上げる次第です。

小論は、ワークショップの要約、解説を目的とするものではない。それはネルソン先生ご自身のサマリーや、ワークショップの資料等に直接あたっていただいた方がよい。ここでは、今、なぜネルソンか、というメタ理論的な意義について、私なりの見方を提示して

おきたい。

発達とはどのようなプロセスとメカニズムによって起るのだろうか。この問は、発達研究に携わるものが、個々の実証研究の彼方にもっている共通の問題であろう。しかし、特に理論に関心をもつ研究者を除いて、日常の実証的研究を超えた理論的問題は往々にして後回しにされたり、とりあえず、借り物で済ませてしまうというのが実態のようである。

今般、キャサリン・ネルソン先生を招聘して開いた国際ワークショップは、まさに現在、発達研究の理論の最先端を学ぶと同時に、我々が普段あまり意識することのない理論的な問題について考え、自らの立場を再考する絶好の機会になったものと考えられる。

私自身がネルソン先生をお呼びしようと考えた理論的な背景は次のようなものである。

発達が生物としての人間に起る現象である以上、何らかの生得性を仮定せざるを得ない。近年の研究で、そのことを明確に示し、また、それを理論の中心に据えたのが領域固有性の理論であり、また、制約理論（あるいは理論理論説）であろう。それは一つの立場として、アメリカの発達研究において依然として大きな勢力を保っている。いや、それどころか、バーバラ・スペルキーやスーザン・ケアリーに代表されるこれらの理論は、彼女たちがともに現在、ハーバード大学の教授であることから分かるように、われわれが想像する以上に非常に強い影響力をもっている。確かに、それ以前の素朴な経験主義や、漠然とした生得論に比べると、はるかにスマートで説得力のある説であることはまちがいない。しかし、スーザン・ケアリーを例にとると、主著、Conceptual Change in Childhood（拙訳『子どもは小さな科学者か』）以後、当初は発達の記述からプロセスとメカニズムの問題へと進むはずだった制約理論が、どんどん生得主義寄りになってしまったことは、ケアリーに期待した者の一人として大変残念なことである。私事にわたるが、1998年度在外研修先の候補として、翻訳を手がけたケアリーのいるニューヨーク大学（当時）にメールで連絡をとった。ケアリーからの返事は大変丁寧なものではあったが、断りのメールであった（結果的には彼女が紹介してくれたマリアンヌ・ワイザーが引き受けてくれることになり、クラーク大学に一年間お世話になった）。理由は三つ述べられていた。MITから移ったばかりで、まだ、落ち着かないこと、年度の途中でフランスに招聘されていて、長期不在となること。これだけの理由で十分であった。私は、納得したはずである。しかし、最後に付け加えられていた理由は、私にちょっとした驚きを与えるものだった。私がケアリーのところでやりたい研究テーマとしてあげた Conceptual change の理論的研究をもうやっていないからだ、というのである。実は、この意味はすぐには分からず、数年たってようやく彼女の理論的スタンスの変化に気付いたのである。

それでは、発達のプロセスとメカニズムに真正面から取り組むグランド・セオリーは可能なのだろうか。領域固有の生得的制約という魅力的な概念装置を放棄するに足るオールタナティブは本当にあるのだろうか。現在のところ残念ながら確実にあるとは言えないが、ネルソン先生の一連の講演の中に、その希望の芽を見出すことができる。

第一に、発達を自己組織化のメカニズムで説明しようという理論的な立場が徐々に具体

的な発達研究としての姿を現してきたことである。たとえば、テーレンとスミスに代表されるダイナミックシステムズアプローチは、伝統的な発達心理学がほとんど自明としてきた内的な構造という発想に根本的な変更を迫るものだった。実は、このことを当初からその理論に組み込んでいた理論家がすでに存在していたことに改めて気づかされた発達研究者も多いのではないだろうか。領域固有性や生得主義という、いわばチョムスキーやフォードの薫陶の下に発展してきた理論が批判し、否定したはずのピアジェ理論がそれであったことは皮肉な現象かもしれない。物理的環境と主体との間の相互作用は、確固とした実在物と個として閉じた主体とがぶつかり合うようなものではなく、お互いに相互に影響を及ぼしあうダイナミックな関係性の中に位置づけられるべきものである。したがって経験とはあくまで環境と主体との間の相互作用の中で構成されるものであって、そうした動的な関係性と独立に特定できるものではない。

とはいえ、ピアジェ理論がそのまま現在の状況に適用できるはずはない。とくに、発達段階論は、同化、調節、均衡化というメカニズムのダイナミックな特性とはおよそかけ離れた不細工な代物だった。何が欠けていたのだろうか。言語と社会性であろう。これらは、ピアジェ理論の欠陥として言い古されていながら、これまでピアジェ理論の本質にかかわるレベルで議論されてこなかった。その代わりに、チョムスキーに連なる領域固有性とヴィゴツキーによって提唱された社会 - 文化的アプローチがそれにとって代わったことは知られている通りである。領域固有性の理論は、言語については勿論のこと、社会性についても、その元になる「他者の心に関する理論」を生得的とする領域固有の理論的制約説をとる。この研究の系譜は、「心の理論 (Theory of Mind: TOM と略される)」研究として現在、理論説の中核をなしていることはよく知られている。

今般のネルソン先生の公開講演ならびにワークショップの眼目の一つは、そうした心の理論にみられるような生得的制約の存在に疑義を呈することであった。言い換えれば、そうしたシンボル世界は、生得的に備わった能力が年齢とともに出現するのではなく、さまざまな経験的な要因、生得的な要因がある目的に応じて、その場で組み上がって現れるのだと考えるのである。それは、心が単一の構造体であるよりは、多くの要素の相互作用によって立ち現れる現象であると見る方がより妥当であるということでもある。ネルソン先生は、それを「心の共同体 (Community of Mind: COM と略される)」への参入という表現を用いて説明した。

第二に、これまで三人称的に一般化してとらえられてきた“経験”を、一人称の“私”を通じて再構成する方向性 (ナラティブ・アプローチ) が示唆されたことも、これまでの心理学が無頓着だった認識論的前提を問い直すオールタナティブの確認になった。経験論的アプローチとネルソン先生が自ら名づけた新しい経験論は、いわゆる客観主義的な経験論とは一線を画すものである。それは主観あるいは間主観 (この用語については敢えて論じなかった) を重要な相と見る経験論であり、したがって意識の出現を重要視する見方でもある。哲学的には現象学を経由しているために、経験の質を問うような問いに対しては、

直截的に答えるのが難しく、歯切れが悪いという印象を受ける。実証研究の際には括弧に入れて、とくに表に出さない“私”ではあるが、理論的には、これを繰り返しているか否かが極めて重要な意味をもってくる。

それでは、ネルソン先生の示唆した経験論的アプローチはすべての問題をクリアーしているのだろうか。現段階では大きな希望ではあるが、まだ多くの重要で困難な問題が残されたままである。いや、一番難しい問題は当然のことながらどのような理論にとっても簡単に解決できるものではない。たとえば、発達初期のアクションレベルから、シンボル世界への参入のメカニズムについて、それを生得的とする以外、これまで満足のいく説明はなされてこなかった。私自身は、この問題は現象学の基本に立ち返って、身体性（embodiment）あるいは身体的認知（embodied cognition）と関連づけることで解決の方向が見出せるのではないかと考えているが、ネルソン先生からこの点について明確な解答は得られなかった。

ネルソン先生の幅広く大きな枠組みによって、生得主義という袋小路を脱する道筋のおおまかな方向性は描かれたように思う。しかし、そこにもっと具体的で、内容のある研究枠組みの詳細を描くのはわれわれ一人一人の仕事である。このワークショップが、多くの新しく挑戦的な研究を生み出すきっかけになることを心から願う次第である。